

(2)趣旨説明

片田 敏孝 (群馬大学大学院 教授)

年末のお忙しい中、この遠い遠い黒潮町まで全国各地の先生方、また黒潮町の先生方、お集り頂きまして、どうもありがとうございます。明日は、月曜日で仕事納めという切羽詰まった中にもかかわらず、この会を催すためにご協力を頂きました、黒潮町長大西様をはじめ、教育委員会坂本教育長様、ご関係の皆さんには本当にお世話になります。ありがとうございます。



片田 敏孝 教授

この黒潮町は全国一の津波想定のある町です。この町にあって、「防災教育をどうするのか」ということで、町民あげて、また先生方も一丸となって、「どうしてもやらなきゃいけない」というそんな思いのなかで、防災教育に取り組んでいって頂いています。

昨年 8 月に和歌山県田辺市で第 2 回の会議を開催いたしました。その際に、先生方は、「日々の防災教育をどうすればいいのか」ということに対して、「御自身の教え子に対する防災教育をどうするか」ということに、まずは大きな関心があるようでした。しかし、少し引いて考えてみると、やはり学校だけではどうにもならない。“育みの環境”として、地域みんなで、一生懸命逃げる子ども達を育む、すると、「単に津波から逃げる」だけでなく、「物事と真剣に向かい合う」、「何でも一生懸命やる」、「地域の弱きものに対する配慮の心を持つ」ようになる。色んな思いを詰め込んで、防災教育を推進することの必要性を感じて頂いたことが、第 2 回だったんだらうと思います。

そして、「このような思いで、町民あげて防災に取り組んでいる現場に行ってみよう」ということで、第 3 回は黒潮町で開催させていただくことになりました。まずはこの後の開放座談会で、日本一の津波想定を突き付けられたあの当時から今日に至るまでの 4 年間の、この地の防災教育の軌跡についてお話ししていこうと思っております。

3.11 から間もなく 5 年が経ちます。焦りにも似た気持ちのなかで、皆さんも防災教育に取り組んでこられたらうと思うんです。そして、地震想定が公表されて 4 年です。ずっとその思いのなかでやってきたんですけども、「これでいいのか」と少し立ちどまる時期にそろそろきているのかなと思っております。「がむしゃらに一生懸命やってきた」、「でも、これで良かったんだらうか」と。「防災教育は単に“逃げる逃げる教育”なのか、いや違う」、では「もっと効果的な防災教育というのはどうあるべきなのか」と。僕も含めてなんです、少し方向を整理しなきゃいけないのかなと感じがしています。そして、何となく先生方がお気づきになれつつあるのは、“防災を介した教育の可能性”です。「防災教育の教育効果は、極めて多岐にわたりそうだ」ということにも気づきつつあるんだらうと思っております。このあたりをもう一度整理をしながら、僕らは津波から生きのびた釜石の子どもたちを目指さなきゃいけない。3.11 のあの日、あのとき、釜石の子ども達は一生懸命逃げた。あの子どもの姿を僕らは勝ち取らなきゃいけない。厳しいところに住んでいるんだけど、そんな子ども達を育みたいと思っているわけです。そうなるためには、もちろん教育の技術も重要ですが、全体としてどうやってそれをつくりあげていくのかということに対して、手探りではありますが、皆で議論しその方向性を見出していかなきゃいけない、そういう状況だらうと思っております。年末のこの忙しい中、これ程多くの先生方にお集り頂いたのも、皆がそういう思いでいるからだらうと思っております。

二日間の日程になりますが、熱心に議論をしていきたいと思っています。そして、何か掴んで帰って頂きたいなって思っております。明日解散するときには、「今回も来て良かった」。「何となく掴んだかも」という思いで帰って頂けることをお祈りしております。

実はですね、この後の議論は余りシナリオを描いていません。座談会ではなく“開放座談会”という名前を付けて、真ん中でしゃべる人は何にかいますが、その周りからもどんどん意見を頂きながら、皆でフリートーキングをしていきたいと思っております。「俺にも一言話させろ」というのも大いに歓迎ですので、どうか一聴衆の立場ではなく、皆さんと共に方向性を見出していきたいと思っております。二日間、よろしくお願い致します。

